タル者

三 車馬ヲ並ベ牽テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

四 水路ニ於テ舟ヲ並ベ通船ノ妨害ヲ爲シタル者

五 氷雪塵芥（塵リアク等ヲ云フ）ヲ路上ニ投棄（投ケ捨ルヲ云フ）シタル者

六 官署ノ督促ヲ受ケテ通路ノ掃除ヲ爲サヾル者

七 制止ヲ肯ゼズシテ路上ニ遊戯ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

八 牛馬ヲ牽キ又ハ繫グヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

九 出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者

十 通行禁止ノ榜示（制札ヲ云フ）ヲ犯シテ通行シタル者

十一 道路ニ於テ放歌（歌ヲ唄フヲ云フ）高聲ヲ發シテ制止ヲ肯ゼザル者

十二 酩酊シテ路上ニ喧噪（ヤカマシクヲ騒クヲ云フ）シ又ハ酔臥（酔テ寐ルヲ云フ）シタル者

十三 路上ノ常燈ヲ消シタル者

十四 人家ノ墻壁ニ貼紙（張リ紙ヲ云フ）及ビ樂書シタル者

十五 邸宅ノ番號標札招牌（看板ヲ云フ）又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標（報告等ノ掛ケ札ヲ云フ）等ヲ毀損（打コハスヲ云フ）シタル者

十六 他人ノ田野園圃ニ於テ菜菓ヲ採食（取リテ食フヲ云フ）シ

又ハ花卉花ヤ草ヲ云フヲ折採折リ取ルヲ云フシタル者

十七公園ノ規則ヲ犯シタル者

十八通路ナキ他人ノ田圃田ヤ畑又庭ナトヲ云フヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入レタル者

第四百三十條　前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル處ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷取リ捌クヲ云フス

刑法略解終

刑法附則略解目錄

第一章　主刑處分
第二章　監視
第三章　假出獄及ビ特別監視
第四章　刑事裁判費用
第五章　賠償處分

刑法附則略解

第一章　主刑執行

第一條　死刑ハ其執行ヲ取リ行フヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ビ典獄刑場ヲ云フ仕置場ニ立會典獄ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行ス可キヿヲ告ケ知ラスシタル後押丁ヲシテ之ヲ決行セシム但其時限ハ午前十時前トス

第二條　死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルヿヲ許サズ但立會官吏ノ許可ヲ免許ヲ得タル者ハ此限ニ在ラズ

第三條　死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作リ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名氏名ヲ書キ記スヲ云フ捺印印形

ヲ押スシ云フ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條　左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヿヲ禁ズ

元始祭　大祀ノ一

孝明天皇祭　國祭ノ一

紀元節　令節ノ一

春季皇靈祭　國祭ノ一

仁孝天皇祭　同

神武天皇祭　同

六月大祓　大祀ノ一

秋季皇靈祭　國祭ノ一

神宮神嘗祭　大祀ノ一

天長節　令節ノ一

後桃園天皇祭　國祭ノ一

新嘗祭　大祀ノ一

光格天皇祭　國祭ノ一

十二月大祓　大祀ノ一

第五條　死刑ノ宣告ヲ渡シヲ受ケタル婦女懷胎ト申言ヒ立ルヿヲ云フスル者ハ醫師及ビ穩婆ヲシテ之ヲ檢査セシメ果シテ懷胎ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ產後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ決行ス可シ

第六條　死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故

舊請フ者アル時ハ典獄之ヲ許可シ下付スルヿヲ得

第七條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマデ何時ニテモ典獄ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見面會スルヿヲ云フヿヲ得

第八條　死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢職業住所及ビ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示高札ヲ云フ公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前

犯罪ノ地

犯人住居ノ地

第九條　徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ監獄管理長官ヨリ內務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發船出帆ヲ云フノ地ニ護送注意シテ送ルヲ云フス可シ

第十條　徒刑ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヿヲ得

第十一條　流刑ノ囚幽閉ヲ云フシ込メ置中獄內ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ典獄之ヲ許ス可シ

第十二條　流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ內務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受ク可シ

第十三條　徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許スヿヲ得但其路費云路用ヲハ自ラ之

ヲ辨ズ可シ

第十四條　流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシムル者ハ監獄近傍云フ近所ヲ限リ典獄ノ監督取リシ配スルヲ云フヲ受ケシム若シ已ムヲヲ得ザル事故云フ事柄ヲアル時ハ典獄ニ請フテ限外ニ出ルヲヲ得

第十五條　流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ビ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條　懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヲヲ得

第十七條　禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サシ請フ者ハ典獄之ヲ許ス可シ

第十八條　服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ビ定役ニ服スル者後犯ノ刑期仕置ノ日限ヲ云フ百日以内ハ工錢ヲ給與セズ

第十九條　囚人ニ給與スル工錢ノ額金高ヲ云フヲ定メ之ヲ交付渡スヲ云フシ及ビ領置受ケ納ル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條　罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未ダ納完全ク納ムルヲ云フザル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收取リ立ルヲ云フズ附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第三章　監視

第二十一條　監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來後ヲ

ヲ云ヲ檢束取リ締リスル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視心ヲ付ケセシムル者トス

第二十二條　監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ犯人ヲ其住居ノ地ノ警察所ニ護送シ監視ヲ執行セシム主刑ノ期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止ダ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ警察所ニ護送ス可シ

第二十三條　犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期始ノ日ヨリ終リヲ記載シタル文書及ビ刑名宣告書ノ謄本ヲ附ス可シ

第二十四條　犯人ノ住居遠地ニ在テ一日程一日路ヲ云フヲ過グル者ハ典獄若クハ檢察官ヨリ先ヅ最近一番近キノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致ス可シ

第二十五條　警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シカト極メシテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直ナニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故アリテ淹滯延引スルシタル時ハ第三十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ遞送取リ次キテ送ルヲ云フス可シ

第二十六條　犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ

期限間遵守謹ミ守ルス可キ條件ヲ讀聞カセ監視ノ票印シ物ヲ云フヲ下付ス可シ

第二十七條　監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一　毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ヲ立テツヽシムヲ云フナルヿヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印見止メ印ヲ云フヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムヿヲ得ザル事故アリテ警察所ニ到ルヿ能ハザル時ハ其事由事柄ヲ云フヲ届出ヅ可シ

二　酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルヿヲ許サズ

三　事故アリテ其住居ヲ轉移引キ移ルヲ云フセントスル時ハ警察所ニ申請願ヒ立ルヲ云フシ許可ヲ受ク可シ

四　擅ニ、氣儘ニ又ハ心儘ニト云フニ同シ他ノ地方ニ旅行スルヿヲ許サズ若シ已ムヿヲ得ザル事故アル時ハ其事由ヲ警察所ニ具申事細カニ申シ立ルヲ云フシ許可ヲ受ク可シ

第二十八條　監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ノ其時ニ付テ摸樣ヲ云フニ因リ其家宅ニ臨檢出張シテ調ヘルヲ云フスルヿアル可シ

第二十九條　警察所ニ於テ住居ヲ轉ズルヿヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ヲ轉宅スルヲ云フノ地ノ警察所ニ通知シ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ遞送ス可シ

第三十條　他ノ地方ニ旅行スルヿヲ許可シタル時ハ

其里程（里數ヲ云フ）ヲ計リ先方ノ地ニ滯留（逗留ヲ云フ）スル時日ヲ算シ往復（往キ復リヲ云フ）日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與ス可シ

犯人先方ノ地ニ到レバ其地ノ警察所ニ出デ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來リ直チニ旅券ヲ警察所ニ還納（返納スルヲ云フ）ス可シ

第三十一條　旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滯（滯ルヲ云フ即チ延ルヲ云フ）シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ證書ヲ受ケ歸著ノ日旅券ニ添ヘ警察所ニ差出ス可シ

第三十二條　監視ニ付スル者住居ナク及ビ引取人ナ

キ時ハ其期限間監獄中ノ別房ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸著（歸國ヲ云フ）スル資力（手當ヲ云フ）ナキ者亦同シ

第三十三條　監獄中ノ別房ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸著スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期（殘リタル日限ヲ云フ）ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條　刑期限内再ビ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付ス可キ時又ハ監視ノ期限間再ビ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付ス可キ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算（合セテ勘定スルヲ云フ）シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條　罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入算入ヲ云フ

可シ

第三十六條　監視ニ付セラレタル者其規則ヲ謹守テ謹守ルヲ云フシ悛改メルヲ云フノ狀アル時ハ警察官ヨリ其事實ヲ上申シ內務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルヲ得

第三十七條　假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ビ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

第三章　假出獄及ビ特別監視

第三十八條　假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ其犯人ノ行狀及ビ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレンヲ內務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條　假出獄ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票證書ヲ云フヲ犯人ニ下付ス可シ

第四十條　假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一本人ノ屬籍氏名年齡住所罪名刑名及ビ處刑ノ年月日

二殘期何年何月何日間假出獄ヲ許ス事

三假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事

四假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止引キ留ルシ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セザル事

第四十一條　重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條　假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票證據ノ書キ物ヲ云フ謄本寫ヲ云ヲ添ヘ犯人ヲ其住居ノ地ノ警察所ニ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ

第四十三條　特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條　特別監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一　毎週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印見留印ヲ云フヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムヲ得ザル事故アリテ警察所ニ到ルヲ能ハザル時ハ其事由ヲ届出ヅ可シ

二　酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルヲ許サズ

三　事故アリテ住居ヲ轉移引キ移ルセントスル時ハ警

察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルヿヲ許サズ

四往復往キ復リヲ云フ一日程ヲ過グル地ニ旅行スルヿヲ許サズ

第四十五條　特別監視ノ期限間ハ警察官吏時官都合ナド云フ同シニ因リ其家宅ニ臨檢スルヿアル可シ

第四十六條　假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル典獄ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條　假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ビ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ監獄中ノ別房ニ留置ス可シ

第四章　刑事裁判費用

第四十八條　豫審下タ吟味ヲ云フ公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ビ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條　日當旅費及ビ止宿料ノ金額金高ヲ云フ左ノ如シ

日當五十錢

旅費一里十錢
止宿料一宿貳十五錢
住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ビ呼出ノ地ニ滯在中ハ日當並ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セズ

第五十條　證人ノ日當旅費及ビ止宿料ハ本人ノ請求ヲ云フ顧ヒ求ルアルニ非ザレバ之ヲ給與セズ

第五十一條　證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第百九十條ニ從ヒ償金ヲ云フ要求ヲ乞ヒ求ムスル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルヲアル可シ

第五十二條　解剖人體等ヲ切リ別ケルヲ云フ舍密等ノ費用及ビ數多

ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條　裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未ダ之ヲ納メザル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

第五章　賠償處分

第五十四條　贓物盜ミ物ヲ云フ犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スルヲ云フ返濟スルヲ云フ雖モ若シ贓轉先カラ先ヘ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給返シ云フセシムル者トス

第五十五條　贓物輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ

由リ買取ヒ取ルシタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハザレバ直チニ還給セシムルヿヲ得ズ

若シ公商ニ由ラズシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムヿヲ得ズ但其買取者ハ賣者ニ對シ轉償ヲ求ムルヿヲ得

第五十六條　贓物ヲ受ケ又ハ典物（質物ヲ云フ）トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムヿヲ得ズ但典物トシテ受取タル者ハ典主（質ニ入レタル者ヲ云フ）ニ對シ轉償（代償ヒヲ云フ）ヲ求ムルヿヲ得

第五十七條　贓物交換（取リ代ヘシヲ云フ）シテ現在スル時ハ公商

ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條　贓物已ニ費用（遣ヒ拂ヒシタル時又ハ識別見分ケルヿヲ云フ）ス可カラザル時又ハ其所在ノ知レザル時ハ損害ノ賠償（償ヒヲ云フ）ヲ請求スルヿヲ得

第五十九條　人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生ジタル損害ハ其賠償ヲ請求スルヿヲ得但失火ハ此限ニ在ラズ

第六十條　贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルヿヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非ザレバ之ヲ請求スルヿ

ヲ得ズ

第六十一條　刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スヿヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式（定規即チ規則ニ同シ）ニ從フ可シ

第六十二條　贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯罪ヲ犯シタル本人ヲ云フ死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルヿヲ得

第六十三條　贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セザル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルヿヲ得

刑法附則略解終

橋爪貫一略解

治罪法略解

明治十五年十月印行

治罪法略解目錄

第一編　總則
第二編　刑事裁判所ノ構成及ビ權限
第一章　通則
第二章　違警罪裁判所
第三章　輕罪裁判所
第四章　控訴裁判所
第五章　重罪裁判所
第六章　大審院
第七章　高等法院
第三編　犯罪ノ搜查起訴及ビ豫審

第一章　捜査
第一節　告訴及ビ告發
第二節　現行犯罪
第三章　起訴
第一節　檢察官ノ起訴
第二節　民事原告人ノ起訴
第三章　豫審
第一節　令狀
第二節　密室監禁
第三節　證據
第四節　被告人ノ訊問及ビ對質

第五節　檢證及ビ物件差押
第六節　證人訊問
第七節　鑑定
第八節　現行犯ノ豫審
第九節　保釋
第十節　公豫審終結
第四章　豫審上訴
第四編　公判
第一章　通則
第二章　違警罪公判
第三章　輕罪公判

第四章　重罪公判
第五編　大審院ノ職務
第一章　上告
第二章　再審ノ訴
第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴
第四章　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
第六編　裁判執行復權及ビ特赦
第一章　裁判執行
第二章　復權
第三章　特赦

治罪法略解

橋爪貫一　略解

第一編　總則

第一條　公訴ハ犯罪ヲ證明スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官ヲシテ之ヲ行フ

第二條　私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ヲ賠償シ又不正ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬スル者ヲ云フ

第三條　公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起

（總則ノ規則ヲ云フ）
（公訴ヲ云フ）
（證據ヲ立テ明白ニスルヲ云フ）
（適當ト云フニ同シ）
（公衆ニ代リテ訴訟ヲナス役人ヲ云フ）
（損失ヲ云フ）
（返還ヲ云フ）
（私ノ訴ヲ云フ）
（盜ミ物又ハ不正ナル品物ヲ云フ）
（賊物ヲ云フ）
（害ヲ被リタル者ヲ云フ）
（受ケタル者ガ自ラ訴フルヲ云フ）

ル者ニ非ズ又告訴私訴ノ棄權出訴スベキヿノ有ルヿニ因テ消滅ナルヿ云フスル者ニ非ズ但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラズ

第四條　私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ附帶付ケ添ヘシテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヿヲ許サヾル場合ハ此限ニ在ラズ

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第五條　公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條　刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラズ若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條　民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴公訴ヲ起スヿヲ云フアルニ非ザレバ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヿヲ得ズ

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヿヲ得

第八條　被告人免訴ヲ免カルヽヿヲ云フ又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケ

タリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙云フト爲ルヿナカル可シ

第九條　公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一　被告人ノ死去

二　告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和（私ニ示談スルヲ云フ）

三　確定裁判（訴ノ期限ノ過タル裁判ヲ云フ）

四　犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五　大赦（刑法ニクワシ）

六　期滿免除（同上）

第十條　私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一　被害者ノ棄權又ハ私和

二　確定裁判

三　期滿免除

第十一條　公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一　違警罪ハ六月

二　輕罪ハ三年

三　重罪ハ十年

第十二條　私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メ

タル期満免除ノ例ニ從フ

第十三條　公訴私訴期満免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪（繼續トハ數日コシテ罪ヲ犯シ遂ケタルヲ云）ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條　期満免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審下タ吟味ヲ云フ若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷タチ切ルヲ云フ其未ダ發覺露ハル、セザル正犯從犯刑法ニクワシ及ビ民事擔當人ニ付テモ亦同ジ期満免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起

算（算用スルヲ云フ）但前後ノ日數ヲ通算（差引勘定ヲスルヲ云フ）シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過（過キ越スヲ云フ）ス可カラズ

第十五條　起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無效ニ屬スル時ハ期満免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無效ニ屬スル時ハ此限ニ在ラズ

第十六條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出デタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又

ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同ジ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴負ケ公事ヲ云フシタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生ジタル損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得

要償損害ヲ受ケタルヿノヒヲ求ムルヲ云フノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマデ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第十七條　被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ズ但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意俗ニワザト云フニ同ジ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯

シタル場合ハ此限ニ在ラズ

第十八條　此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セズ若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ヘキヲ云フス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラズ

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條　此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿ザル者ト雖モ三里以上ナル時亦同ジ

島地又ハ外國トノ路程道ノリヲ云フノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條　此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別別段ト云フニ同ジノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條　訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セザル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ屆置ク可シ否ラザル時ハ書類ノ送達送リ屆ケルヲ云フナシト雖モ異議ヲ申立ルヿヲ得ズ

第二十二條　此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラザル時ハ書記其送達書ヲ

作リ書記局所屬ト云フ附屬ニ同ジノ使丁使ヲスルヲ者ヲ云フナシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ミ賴任スルヲ云フス可シ

第二十三條　送達書ハ二通ヲ作リ其一通ヲ本人ニ渡スヿヲ得ザル時ハ其住所ニ於テ同ス可シ本人ニ渡スヿヲ得ザル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名氏名ヲ記スヲ云フ捺印印形ヲ押スヲ云フ捺印セシム若シ署名捺印スルヿ能ハザル時ハ其旨ヲ附記書キ添ヘルヲ云フス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヿヲ得ズ若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヿヲ肯ゼザル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印（見留印ヲ押スヲ云フ）シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ビ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納（返シ納メルヲ云フ）シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存（殘シ置クヲ云フ）ス可シ

第二十四條　休暇ノ日及ビ日出前日沒後ハ書類ノ送

達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラズ

第二十五條　官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ビ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉一葉ツヽ（割印ヲ押スヲ云フ）ニ契印（割印ヲ押スヲ云フ）ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルヿ能ハザル場合ニ於テハ其事由（事柄ヲ云フ）ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非ザル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルヿ能ハザル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條　官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄改メカヘルヲ云フス可カラス若シ挿入削除ハ文字ヲ增シ又ハ減スルヲ云フ及ビ欄外界ノ外ヲ云フノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ベキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更增減變更增減ハ文字ヲカヘ又ハ增シ減シヲスルヲ云フノ效ナカル可シ

第二十七條　此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カザル時ハ其效アリトス

第二十八條　此法律ハ將來今ヨリ後ト云フニ同シ頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸ヲ云フスル規則ハ此限ニ在ラズ

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラズ

第二十九條　此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヲ得ズ

第三十條　此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編　刑事裁判所ノ構成及ビ權限

第一章　通則（一編一章ニ限リ通スル所ノ規則ヲ云ナリ）

第三十一條　通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條　裁判所ノ位置（場所ヲ云フ）及ビ管轄ノ區劃（區別ヲ云フ）ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁（勅裁ヲ仰グヲ云フナリ）ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條　裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條　刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一　犯罪ヲ搜査（索メ探ルヲ云フ）ス

二　犯罪ニ付キ取調ノ處分及ビ法律ノ適用ヲ裁判官

ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ビ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷（裁判所ヲ云フ）ニ立會フ可シ

第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條 書記ハ豫審及ビ公判（豫審後ノ事件ヲ受ケテ裁判スルヲ云フ）ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存（存シ置クヲ云フ）ス可シ

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヲ左ノ如シ

一 違警罪ハ違警罪裁判所

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ビ輕罪又ハ輕罪及ビ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶（一ノ犯罪ト一ツラナルノ犯罪ニ非ズト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス）

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀（二人以上言ヒシテ日時又ハ場所ヲ異ニシ合スヲ云フ）

數罪ヲ犯シタル時

三自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カルヽ爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條　同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ビ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラザル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條　數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續引ツヽキシテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ル一度ニアラハノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條　犯罪ノ地ニ非ザル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致スヲ云フス可シ

送遣ハ令狀召捕ノ書ヲ付ヲ云フヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條　數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルヿ能ハズ若クハ法律上逮捕スルヿヲ許サヾル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手取リ掛ルトシタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス云フニ同シ

第四十四條　從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其

管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院ヲ審判ヲ云フ高等法院ハ高貴顯官ノ犯罪及ビ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラズ

第四十五條　外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ內地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ

以テ其管轄ナリトス

闕席裁判ヲサル儘ニテ裁判スルヲ云フ闕席裁判ハ被告人カ裁判所ヘ出ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終ト云ニ一番終リニ同シ住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラザル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條　商船內ノ犯罪ニ付テノ管轄及ビ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條　豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預タツサハル又ハアツス可カラズ前ニ豫審又ハ公判ヲ爲カル等ト云フニ同シシタル裁判官ハ哀訴其情實ヲ訴ヘテ歎キ願フヲ云フ及ビ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カ

ラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條　裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決ヲ定メル云フスルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルヲ得

第二章　違警罪裁判所

第四十九條　治安裁判所ハ民事ノ尤モ輕キ警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條　違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條　違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條　違警罪裁判所檢察官ハ毎月末決未タ裁判ノ濟マザル云フ既決最早裁判ノ極リタルヿヲ云フ事件表ヲ作リ輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印見留印ヲ云フシ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條　違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章　輕罪裁判所

第五十四條　始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ビ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條　輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ズ

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第五十六條　豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ズ

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命ズルヲ得

第五十七條　判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得

第五十八條　輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名（名指シト云フニ同シ）シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條　輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條　東京警視本署長及ビ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査（探リ求ムルヲ云フ）ス

ルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラズ

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐助ケヲナスヲ云フトシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラザル地ノ戶長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地內ニ於テ證憑其他事實參考ヲ云フトナル可キ事物ヲ集取ルヲ云フ集メ取リ調ルトナルクルフアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ビ公判ノ未決裁判ノ米ダ濟マザル者ヲ云フ既決裁判タル者ヲ云フノ事件表ヲ作リ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章　控訴裁判所

第六十三條　控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲スヿヲ可シ

第六十四條　刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ズ又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續引キ續ケセシムルヿヲ得

第六十五條　刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルヿヲ得

第六十六條　刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條　檢事長ハ其裁判所ノ管轄地內ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ビ起訴（訴ヘヲ起スヲ云フ）ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルヿヲ得又起訴及ビ其他ノ職務ニ付キ其管轄地內ノ檢察官ニ告達スルヿアル可シ

檢事長ハ其管轄地內ノ檢察官及ビ司法警察官ヲ監督（支配スルヲ云フ）ス

第六十八條　檢事長ハ三月毎ニ豫審及ビ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記書キ添ヘスルヲ云フ可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條　刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章　重罪裁判所

第七十條　重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條　重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ビ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開廳裁判所ヲ開クヲ云スルヲ得

第七十二條　重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條　重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ズ

二陪席列座ヲ云フ判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ジ始

審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ビ先任ニ任官シタルヲ云フノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

第七十四條　重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヿヲ得

第七十五條　重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條　控訴裁判所檢事長ハ閉廳裁判所ヲ閉ルヲ云フノ後既決事件表ヲ作リ司法卿ヘ差出ス可シ事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ

ヲ附記ス可シ

第六章　大審院

第七十七條　大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一　上告

二　再審非常ノ上訴ヲ云フ猶ホ此書ノ第四百三十九條以下ヲ見ルヘシ　ノ訴

三　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四　公安又ハ嫌疑疑ヒ恐レ等ヲ云フノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條　刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非ザレバ裁判ヲ爲ス可カラズ

第七十九條　刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請申シ上天皇ニ

ルヲニ因リ其院判事ニ之ヲ命ズ判事差支アル時ハ民事局判事授任官スルノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條　刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條　刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條　檢事長ハ三月毎ニ豫審及ビ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章　高等法院

日本全國ニ於テ第一等ノ裁判所ヲ云フ

第八十三條　高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ビ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯自ラ手ヲ下シテ罪ヲ及ビ從犯罪ヲ犯ス者ノ助ケヲナシタルヲ云フハ身分ノ如何ヲ問ハズ其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條　高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ビ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條　高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一　裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ズ

二　豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ズ

第八十六條　豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ズ

第八十七條　高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條　高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條　高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サズ但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヿヲ得

一　闕席裁判（闕席裁判ト云フハ被告人カ裁判所ヘ出テサル裁判ヲ云フ）アリタル場合ニ於テ故障（故障ヲ云フ）差障リ

二　第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三　第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審（再吟味ヲ云フ）ノ訴

第九十條　被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命ズルヿアル可シ

第九十一條　高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編　犯罪ノ捜査起訴及ビ豫審

犯罪ハ犯シタル罪ヲ云ヒ捜査ハ探リ考ヘルヲ云ヒ起訴ハ訴ヲ起スヲ云ヒ豫審トハ下吟味ヲ云フナリ

第一章　捜査

犯罪ヲ探リ考ヘルヲ云フ

第九十二條

檢察官ハ後ニ記載シタル告訴被害人ガ自カラ訴ヘヲ爲スヲ云フ告發他人ヨリ訴ヘルヲ云フ現行犯現ニ罪ヲ犯セルヲ云フ其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヿヲ認知見留ルヲ云フシ又ハ犯罪アリト思料ヲ云フシタル時ハ其證憑證據ヲ及ビ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節　告訴及ビ告發ヲ云フ

告訴ハ被害人自カラ之ヲ爲ス告發ヲ云ヒ告發ハ他人ノ之ヲ爲ス

第九十三條　何人ニ限ラズ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルヿヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヿヲ得其告訴ヲ受ケタル

司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條　告訴人ハ成ル可ク其證憑ト為シテ依ル及ビ事實參考事柄ノ實ヲ考ヘト爲ル可キヿヲ申立ツ可シ」アハスヲ云フ

又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヿヲ得

第九十五條　告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ニヲ以テ之ヲ爲スヿヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞セ共ニ署名捺印印ヲ押スヲ云ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヿ能ハザル時ハ其旨ヲ附記書キ添ルヲ云ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條　官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知ルヲ云シ又ハ重罪輕罪アリト思料ルヲ云シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ」

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證憑ヲ及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條　何人ニ限ラズ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地

ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルヲ得」

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條　告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラズ

無能力者ハ無能力者ト自分ノ權理ヲ自分ヲ行フヲノ出來ザ者ヲ云フノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

第九十九條　告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルヲ云フヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ損害ノ賠償ヲ求ノ訴ヲ受クルヲアル可シ

第二節　現行犯罪

第百條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺顯ルヽ云フ　シタル罪ヲ謂フ

第百一條　重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ズ

一　犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルヽ時

二　兇器贓物盜ミ物云フ其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三　家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證吟味スル云ヲ爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第百二條　司法警察官及ビ巡査其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラズ又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致ス云フ　引立ルヿヲ得

第百三條　巡査被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ビ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第百四條　司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取

リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問事實ヲ問フヲ云フ及ビ檢證處分ヲ爲ス可シ

第百五條　何人ニ限ラズ重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヿヲ得

第百六條　前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヿヲ得ザル時ハ自己ノ氏名職業住所及ビ其逮捕ノ事由ヲ陳述言ヒノベルヲ云フ假ニ之ヲ巡査ニ引渡スヿヲ得被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官

署ニ至ルヿヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當至理當然ノ事由アルニ非ザレバ其求ヲ拒ムヿヲ得ズ

第二章　起訴ヲ云フ

第一節　檢察官ノ起訴

第百七條　檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審下吟味ヲ云フヲ求ム可シ

二輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ヲ云フヲ云フニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所

ニ其訴ヲ爲ス可シ

三違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セザル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラズ又ハ公訴受理受ケ付ルヲ云フヲ云フス可カラザル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラズ

第百八條　前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時

ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第百九條　檢事豫審ヲ求ムル時ハ證憑及ビ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢出張シテ點檢スルヲ云フ可キ場所逮捕ス可キ人名及ビ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節　民事原告人ノ起訴（被害者一箇ニテ起ス訴ヘヲ云フ）

第百十條　重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶付添ルヲ云フシテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公

訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第百十一條　被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマデ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

第百十二條　被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權訴訟權ヲ拋棄スルヿヲ云ヲ爲スヿヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章　豫審（下吟味ヲスルヿヲ云ヲ）

第百十三條　現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非ザレバ豫審ニ取掛ルヿヲ得ズ此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效一切無效ナルヿヲ云ヲ可シ

第百十四條　豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可

キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ撿事ニ送致ス可シ

第百十五條　豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヿヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ撿事ニ通知シ且證憑證據同シ及ビ事實參考トナル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ撿事起訴ヲ爲サヾル時ハ速ニ被告人ヲ放免釋シ遣ルヿヲ云フヿス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ヲ云マタゲフヿヲ爲ルヿナカル可シ

第百十六條　被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ撿事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急

速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ撿證處分ヲ爲シタル後證憑及ビ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヿヲ得

第百十七條　撿事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ撿閲シラベ見ルヿヲ云フスルヿヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付返却スルヿヲ云フヿス可シ

又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヿヲ得

第一節　命狀命令スル所ノ書ヲ云フ

第百十八條　豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ヅ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷同シトノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出廷ノ日ヲ過グルヿヲ得ズ

第百十九條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケ可キ被告人其管轄地內ニ住セザル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託委託ニ同シスルヿヲ得

第百二十條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セザル時ハ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

第百二十一條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

一　被告人定リタル住所アラザル時

二　被告人罪證ヲ湮滅スヿヲ云フヿシ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三　被告人未遂罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ゲントスルノ恐アル時

第百二十二條　勾引狀執行ノ命令ヲ云フヿヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可

シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間經過ルヲ云スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非ザレバ當然之ヲ釋放ルヲ云ス可シ

第百二十三條　勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヿヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第百二十四條　前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ問タバスベキ箇條ヲ示スヲ云フ其處

分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヿヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見云フヿヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條　豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病云病氣ヲ其他正當不正ナラヌ道理ヲ云フノ事由アリテ令狀ニ應ズル能ハザルヿヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ被告人

其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第百二十六條　勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非ザレバ之ヲ發スルヿヲ得ズ

第百二十七條　豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過グル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付何時ニテモ召出ニ應スヘキ約ヲ云可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヿナク更ニ十日間之ヲ勾

留留メ置ク云フヿヲ豫審判事ニ求ムルヲ得ズ可キヿ

第百二十八條　收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非ザレバ之ヲ發スルヿヲ得ズ

第百二十九條　收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一　被告事件ノ概畧同シ及ビ加重減輕罪ヲ加ヘテ重クシ又減シテ輕クスル云ノ模樣アル時ハ其概畧

二　其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三　檢察官ノ意見ヲ聽キタルヿ

第百三十條　總テ令狀ニハ被告事件及ビ被告人ノ氏名職業姓名家業云フ住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ

外其氏名分明ナラザル時ハ容貌體格カホ、カタチ、セイカツコウヲ云フ等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月時ヲ記載シ豫審判事及ビ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡査ヲシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條　召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ノヲ云フ使ヲナスモノヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十二條　勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査數人ニ分付ルヲ云フスルヿアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本寫シ書ヲ云フヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十三條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿カクレ居ルヲ云フシタリト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣佑近隣ノ者ヲ云フ二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索家屋ヲ吟味スルヲ云フス可シ

巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラズ搜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日沒後日ノ出前日ノ入後ヲ云フ之ヲ爲スヿヲ

得ズ

第百三十四條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヿヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルヿヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時執行ヲ求ム可シ

第百三十五條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知ト云フヿヲ能ハザル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜査及ビ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スルヿヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜査及ビ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第百三十六條　陸海軍將校以下ニ常ニ在營屯所ヲ軍屬軍掛ノ云フヿニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヿヲ得ザル差支アルニ非ザレバ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應ゼシム可シ其行軍出陣ヲ云フノ際亦同ジ

第百三十七條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉揚リ屋ヲ云フニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヿ能ハザル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヿヲ得何レノ場合ニ於テモ監倉長

ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第百三十八條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シタルヿ又執行スルヿ能ハザル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡査ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第百三十九條　勾留狀ニハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舍牢屋ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ビ謄本ニ記載ス可シ

第百四十條　密室監禁一人別室ニ勾留ヲ云フノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則獄屋中ノ規ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊友人ヲ又ハ代言人ニ接見面會ニスルヿヲ得

書翰書籍手紙ヤ書物ヲ云フ其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非ザレバ被告人ト外人ト之ヲ授受ニ遣リ取リスルヿヲ許サズ但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヿヲ得

第百四十一條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ズト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫ノ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第百四十二條　監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與カシムルヿヲ云フヿヲ得ス可シ

第二節　密室監禁

第百四十三條　豫審判事ハ豫審中事實發見事件ノ實ヲ見出スヲ云フノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢必ラス入用ト云フニ同シ別室ニ拘留シテ外人ト接見スルヲ禁スルヲ云フ事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第百四十四條　密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許免許ニヲ得ルニ非ザレバ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヿヲ許サズ

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第百四十五條　密室監禁ハ十日ヲ超過過キ去ルヲ云フヲ可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改更ヘ改メルヿヲ云フスルヿヲ得言渡ヲ更改スル時ハ其事由同シ事柄ニヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節　證據

第百四十六條　法律ニ於テハ被告事件ノ模樣ニ因リ

有罪ナルノ推測（推量ニ同シ）ヲ定ムルヿナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑（犯罪ニ付テノシルシ等ヲ云フ）ハ裁判官ノ判定（考ヘ定ムルヲ云フ）ニ任ズ

第百四十七條　豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權（職務上ノ權理ヲ云フ）ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取（取リ集ムルヲ云フ）ス可シ

第百四十八條　豫審判事臨檢家宅捜索物件（品物ヲ云フ）差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヿ能ハザル時ハ立會人三名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項前ノ二ノ云ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節　被告人ノ訊問及ビ對質（訊問ハ問フヿヲ云ヒ對質ハ被告人ト他ノ者ト相對セシメテ事實ヲ發見スル爲ニスルヲ云フ）

第百四十九條　豫審判事ハ先ヅ被告人ヲ訊問ス可シ

但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラズ

第百五十條　豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇オドシ付ケ又ハ詐言偽リノ言語ヲ云フヲ用フ可カラズ

第百五十一條　書記ハ訊問及ビ陳述申シ立テヲ錄取シ書キ取ル被告人ニ之ヲ讀聞カス可シヲ云フ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ニ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ

若シ署名捺印スルヿ能ハザル時ハ其旨ヲ附記書キ添ヘルヲ云フ可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヿヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第百五十二條　被告人其陳述ニ付キ變更增減ス可キヿヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ビ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第百五十三條　被告人ハ陳述書ノ謄本寫シ書ヲ云フヲ求ムルヿヲ得

第百五十四條　豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヿ人違ナキヿ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人

又ハ其他ノ者ト對質云フ決セシムルヿヲ得

第百五十五條　書記ハ對質人ノ陳述及ビ對質ニ因リ生ズル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第百五十一條第百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百五十六條　被告人又ハ對質人聾ツンボナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ヲ云フナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラザル時ハ通事ヲ命ズ可シ

被告人又ハ對質人國語日本語ヲ云フニ通ゼザル時亦同ジ

第百五十七條　通事ハ正直ニ正實同シニ通譯ヲ云フ解キ直スス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百九十二條第百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節　檢證及ビ物件差押

檢證ハ證跡ヲ勘察スルヿヲ云ヒ差押ハ犯罪ニ用ヒタル品又犯罪ニ因テ得タル品物一切ヲ差シ押ヘルヿヲ云フ

第百五十八條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證犯罪ノ證跡ヲ點檢スルヿヲ云フヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢犯所ニ至テ檢スル可シ證スルヲ云フ

第百五十九條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法仕方ヲ日時月日時刻場所及ビ被告人ノ人違ナキヿヲ證明テ明スヲ云フ可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第百六十條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ビ模樣ニ因リ被告人ノ人違ナキヿヲ又ハ犯罪ノ模樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ捺ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護預リ護ル又ハ遞送スルハ書記之

ヲ擔任取扱フヲ云フ可シ

第百六十一條　豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラザル時ハ場所ノ周圍ハ廻リ又同ヲ閉鎖ムルヲ云シ又ハ看守者番人ヲ置クヿヲ得

第百六十二條　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿隱蔽スルヲ云フ

所ニ臨檢スルヿヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿取リカクスル者其住所ニ在ラザル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラザル時ハ戶長ノ立會アルヲ要ス

第百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用

ス

第百六十三條　被告人ハ臨檢家宅捜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヿヲ得若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヿヲ得ズ但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラズ

民事原告人及ビ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヿヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ハスヿヲ可カラズ云フ

第百六十四條　家宅捜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本寫シヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハズ其物件ヲ被告人ニ示シ辯解明瞭ニ事由ヲ爲サシム可シ

其訊問及ビ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百六十六條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヿヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十七條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分

中何人ニ限ラズ允許免許ニ同シ

入スルヿヲ禁ズルヲ得ズシテ其場所ニ出ヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥逐ヒ退ケシ又ハ處分ヲ終ルマデ之ヲ留置トメチシスルヿヲ得云フ

第百六十八條　豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ノ時機ヲ因リ臨檢家宅捜索ノ事ヲ其地ノ治安違警罪裁判所ニ囑託委任スルヲ云フ

第百六十九條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受

取開披開クヲ得ルヿヲ云フ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付還シ與フルヲ云フス可シ

第六節　證人訊問證據人ニ問ヒ尋ルヿヲ云フ

第百七十條　豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名名指シヲ同シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數云フ數ヲ夥多人數ノ多キナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ヅ之ヲ呼出ス可シ但事實發

見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラズ

又原被ノ指名セザル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヿヲ得

第百七十一條　證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託シ忘ルヿヲ云ス可シ

第百七十二條　豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セザル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第百七十三條　呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ビ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時（日子時刻ヲ云フ）場所及ビ呼出ニ應ゼザル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヿアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ三十四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條　證人疾病公務其他正當ノ事故事柄ニ因リ呼出ニ應ズル能ハザルヿヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百七十五條　證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官屯所ノ長官ヲ云フヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キヿヲ認可承知ニシ又ハ職務上已ムヿヲ得ザル差支アル時ハ同ジ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應ゼザル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ビ控訴ヲ許サズ

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當出ダサシムルヿヲ云フセシム」若シ證人再度ノ呼出ニ應ゼザル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

第百七十七條　豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケザルヿヲ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルヿ又ハ豫知シ難キヿヲ豫知リ難キヿト云フヿヲ前以テ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハザリシヿヲ證明シタル時ハ

検事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消スヲ可シ

第百七十八條　證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出スヲ可シ若シ之ヲ遺失ヲ云フシタル時ハ其人違ナキヲ證明スヲ可シ

第百七十九條　豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齡職業住所及ビ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フヲ可シ

第百八十條　豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎愛シ或ハ憎ム人ヲ云フ畏懼ヲ云フハ人ノ心ナク正實ニ陳述ヲ云フヲ爲スヲ可キヲ宣誓ヲ立テシムヲ可シ宣誓ヲ云フヲセシムヲ可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印

セシム若シ署名捺印スルヲ能ハザル時ハ其旨ヲ附記スヲ可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ヲ可シ

第百八十一條　左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヲヲ許サズ但事實參考ヲ爲シ其陳述ヲ聽クヲヲ得ル

一　民事原告人

二　民事原告人及ビ被告人ノ親屬

三　民事原告人及ビ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四　民事原告人及ビ被告人ノ雇人

第百八十二條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同ジ

一 十六歲未滿ノ幼者

二 知覺云フ知惠ヲ精神ノ不充分ナル者ヲ云フ心ノ確カナラサルヲ云フ

三 瘖啞者ヲ云フ

四 公權ヲ全ク奪ヒ取セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

公權ヲ行フヿヲ止メルヲ云フ

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケタル者

又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラザルニ因リ免訴放免セラルヽヲ云言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯ゼズ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯ゼザル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ビ控訴ヲ許サズ

醫師藥商穩婆取擧ケ云フ又ハ低言人辯護人代書人公證人若クハ神官云フ僧侶云フ坊主ヲ其身分職業ニ關スル秘密ニ內密同ジノ事件ニ付キ委託委任ニヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラズ

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ビ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムル

得

第百八十五條　豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヿヲ得

若シ證人同行スルヿヲ肯ゼザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條　第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條　皇族宮親王又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條　書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書

ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヿ又ハ爲サザルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條　豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更ヲ云フ增減フヤシタリヘラシタリスルヲ云フセンヿヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヿ及ビ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ビ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヿ能ハザル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條　證人ハ即時出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得

若シ日稼其日稼ヲ以テ生業仕活ヲトスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節　鑑定

第百九十一條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法仕方ヲ及ビ結果爲シ終リタルヲ云ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條　鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命ズルコト及ビ呼出ニ應ゼザル時ハ罰金ヲ言渡ス可キコトヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應ゼザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルコトヲ得ズ

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條　鑑定人ハ正實ニ鑑定見極メタルヲ云フヲ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾

鑑定ヲ命シタル書ニ記載シタル之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ事面ノ終リヲ云フ

第百九十四條　鑑定人宣誓ヲ肯ゼズ又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯ゼザル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ビ控訴ヲ許サズ

第百九十五條　第百八十二條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命ズルヿヲ得ズ但急遽急場ヲノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ヲキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命ズルヿヲ得ニハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ

第百九十六條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會ヲ可シ一人又ハ數人ヲシテ

第百九十七條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權判事ノ職權ヲ云フヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヿヲ得

第百九十八條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結果效果ニ同シ及ビ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記詳ニ書キノスル可シ

若シ結果ヲ得ザル時ハ其推測推測ヲ云フスル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見見込ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署

名捺印及ビ契印割印ヲ云フス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命ジタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條　鑑定人及ビ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節　現行犯ノ豫審

第二百一條　豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢出張スルヲ云フシ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百二條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續引續クヲ云フス可キ者ニ非ザルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條　檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヿナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル被告人證人ヲ訊問シ家宅ヲ搜索シ物件ヲ差押フル等ヲ云フ處分取計ラヒヲ云フヲ爲スヿヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ズ

證人及ビ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヿヲ要之ヲ聽ク可シ

第二百四條　前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條　第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務現行犯ノ場合ニ於テ豫審判事ニ屬スル處分ヲ云フハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スル權ハ之ヲ得ズ

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時內ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リ勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハズ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラザル者ト認タル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條　豫審判事ハ二十四時內ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解

キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

第二百八條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ヲ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヿヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條　檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ下ル可キヲ云フ所ニ及バズト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヿヲ得

第九節　保釋假釋

第二百十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出シニ應ジ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシタル保釋ヲ許スヿヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第二百十一條　前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條　保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證（請合ト云ヒ同シ）セシム可シ但豫審判事其金額（金高）ヲ云ヒ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條　保證ヲ爲ス者ハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第二百十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由正シキ理由ナク云ヲシテ出廷セザル時ハ保證金ノ全部盡ク云同ジ又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百十五條　保釋金ヲ沒入スルニハ撿事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收スルヲ云ヲ可シ

第二百十六條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ撿事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡還警罪裁判所ニ移ス可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ撿事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條　豫審判事免訴ノ言渡還警罪裁判所ニ

移スノ書渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハズ檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬云フ又ハ故舊云フ朋友ヲ云フ預ルヲ云フ責付スルヲ得

第十節　豫審終結

第二百二十條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ズトシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヲナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ十切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條　檢事ハ豫審充分ナラズト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯ゼザル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハズ後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ザルヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要

スル者ト認メタル時ハ前言證シタル令狀ヲ存シ又
第六新三令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ送付ス可シ
第三百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ
言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言
渡ヲ爲ス可シ
一犯罪ノ證憑充分ナラザル時（被告人無罪タルノ證據アルカ又ハ其犯證充分ナラ
スシテ罪ノ有無疑ハシキ場合ヲ云フ）
二被告事件罪ト爲ラザル時（懲戒ス可キ所爲アルモ法律ニ於テ之ヲ罪ト爲サザル場合ヲ
云フ）
第二十一條　檢事ハ左ノ場合ニ於テ三日内ニ公訴ヲ
三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
四確定裁判ヲ經タル時

五大赦ヲ云フ放アリタル時
六法律ニ於テ其罪ヲ免ズル時（偽證者其事件ノ裁判直渡ニ至テサル前ニ於テ
自首シタル場合ヲ云フ）
本條ハ傷害ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非ザレバ
要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ズ
第二百二十五條　被告事件違警罪ナリト思料シタル
時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾
留ヲ受ケタル時ハ釋放（釋放トハ其罪ノ問フ可キモノアル
告人ノ自由ヲ停止スルヲ云フ）ノ言渡ヲ爲ス可シ
第二百二十六條　被告事件輕罪ナリト思料シタル時
ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヲ得若シ被告人未ダ勾留ヲ受ケザル時ハ令狀ヲ發スルヲ得

第二百二十七條　被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ」

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮ヲ云フアルマデ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監

倉掠ヲ去ラ屋ニ被告人ヲ留置ス可キ旨ヲ記載ス可シ

第二百二十八條　豫審終結ノ言渡ニハ事實及ビ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非ザルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラザル旨公訴受理ス可カラザル旨及ビ其原由又犯罪ノ證憑充分ナラザル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質云フヲ模樣證憑ノ充分ナルヲ及ビ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百三十九條　前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名苗字名等ヲ云フ明示ス可シ

第二百三十條　書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本云フヲ檢事民事原告人及ビ被告人ニ送達ス可シ

但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

第二百三十一條　被告人ヲ逮捕召捕ルヲ云フスル能ハザル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留捕云フヲ受クルモ非ザレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ズ

第二百三十二條　前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヿヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條　豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略云フニ同シナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章　豫審上訴

第二百三十四條　左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマデ何時ニテモ故障檢察官又被告人ヨリ爲改正セシヲ會議局ニ訴フルヲ云フ

スル所ノ上訴ヲ名ケテ故障ト云フヲ為スヲ得

一管轄違ノ申立ヲ棄却トリステルヲ云フシタル時

二法律ニ背キ命令ヲ發シ又ハ之ヲ發セザル時

三法律ニ背キ保釋責付ヲ為シ又ハ之ヲ為サヾル時

四越權ノ處分アル時（豫審判事其職權ヲ超越シテキマヽニ處分ヲ為シタル時ヲ云フ）

民事原告人ハ私訴（私ノウッタヘヲ云フ）ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ為スヲ得

第二百三十五條　故障ヲ為サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本（寫本ヲ云フ）ヲ對手人（相手方ヲ云フ）ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書（請書ヲ云フ）ヲ差出ヌヿヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ為シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條　故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニヲ趣意書答辯書其他訴訟書類及ビ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決（取リ捌クヲ云フ）ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ為スヿヲ得

第二百三十七條　左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマデ豫審判事ヲ忌

避忌ヲ嫌フヿヲ云フスルヿヲ得

一豫審判事又ハ其配偶者其夫妻ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時妻ト血族姻族ノ縁故アル時ヲ云フ

二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三豫審判事又ハ其配偶者其夫妻ヲ云フ二於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヲ身依リヨリ賄賂マイナヒヲ云ヒ非ズト雖モ贈物ヲ收受シ受ケ入ルヿヲ云ヒ若クハ聽許其事ヲ聞キ入ルヿヲ云ヒシタル時

第二百三十八條　忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲スヿヲ可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出スヿヲ可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ許スヿヲ又ハ棄却却下スルヿヲ云フ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條　豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヿヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條　豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審人手續ヲ繼續ヲ云フス可シ但終結ノ言渡ヲ

爲スヿヲ得ズ

又急速ヲ云フヿヲ要セザル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヿヲ得

第二百四十一條　會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヿヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非ザレバ之ヲ爲スヿヲ得ズ

第二百四十二條　豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヿヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條　會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヿヲ得

第二百四十四條　書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヿヲ得

第二百四十五條　檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヿヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヿヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條　檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非ザレバ故障ヲ爲スヿヲ得ズ

第二百四十七條　故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條　檢事民事原告人及ビ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百四十九條　故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマデ何時ニテモ附帶ツケハヘ ノ故障ヲ爲スヿヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手

人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百五十條　豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマデ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セズ

第二百五十一條　書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條　會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百五十三條　會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條　會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ヲ云フヿヲ見出スヿヲ云フヿヲ得タル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消

スヿヲ得

第二百五十五條　會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ニ罪ヲ犯スヿヲ云フノ起訴ヲ受ケザル者アルヿヲ發見シタル時ハ檢事ヨリ豫審ヲ受ケザル者アルヿ附帶ノ犯罪ニ付ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條　故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ビ被告人ニ送達ス

可シ

第二百五十七條　檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第二百五十八條　被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヿヲ得可キヿ及ビ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマデ被告人上訴ノ權ヲ失フヿナカル可シ

第二百五十九條　第三百十一條ヨリ第三百十三條マデノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シツカトキマルヲ云フシタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速

ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ビ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分取計ヒヲ檢事ニ命ズ可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更ガハリ更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證憑證據ニアル時ハ此限ニ在ラズ

新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編　公判

公判ト公判決ヲ爲スヲ云フ

第一章　通則

第二百六十二條　訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ帳面ヲ登記記載スルヲ云フ

シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決未ダ決セザルヲ云フ幻留ノ日數ヲ減縮減シ縮メルヲ云フ

スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

又重要ナル事由設ヘハ急ニ他ノ地方ヘノ爲メ檢察官發途スル等ノ事ヲ云フ

其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヲ得

第二百六十三條　重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ビ裁判言渡ハ之ヲ公行公ケニ行フヲ云フ否ラザル時ハ其言渡ノ

效ナカル可シ

第二百六十四條　被告事件公安社會ノ安全ヲ害シ又ハ猥褻ミダリカハシキコトヲ云フニ渉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ビ辯論ノ傍聽ヲ禁ズルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ禁ズルコトヲ得

第二百六十五條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヒキシバルヲ受クルコトナシ但守卒モリヲ云フヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病ヤマヒヲ云フアルニ非ズシテ出廷ヲ肯諾スル又ハ承知スル等ニ同シゼザル時ハ之ヲ引

致引連レ來ルヲ云フスルコトヲ得若シ出廷シテ辯論スルコトヲ肯ゼザル時ハ對審同シトシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條　被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人即チ代言人ナリヲ用フルコトヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ非ザル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第二百六十七條　被告人公廷ニ於テ暴行亂暴ニ又ハ喧騷騷々シキ音聲ヲ發スルヲ云フヲ爲シ辯論ヲ妨礙サマタゲヲ云フスル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ツゲイマシムルヲ云フヲ爲シ仍ホ之ニ從ハザル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告

人ヲ退廷其裁判所ヲ退セシメ若クハ勾留引留メ置ルヲ云フスルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ビ裁判言渡ヲ爲スヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシムヲ可シ

第三百六十八條　被告人精神錯亂シタルヒミダリ又ハ疾病病氣ヲ云フニ因リ出廷スルヲ能ハザル時ハ痊癒病ノ全快ヲ云フニ至ルマデ辯論ヲ停止ニ同シス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒病ノ全快ヲ云フノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ

罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ビ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヲナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷裁判所ヘ出セズト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非ザレバ闕席裁判ヲ爲ス可カラズ

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スル能ハザル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セザル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

第二百七十條　闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルヿヲ許サズ但其親屬身依リ云フ故舊朋友ヲ云フハ被告人ノ出廷スルヿ能ハザルノ事由ヲ證明スルヿヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セズ

ト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條　裁判長官ヲ云フハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ取計ヒヲ云フヲ爲ス可シ

稱讃ホメタヘ誹謗ソシリノヲ云フ其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ差止メルヲ云フ又ハ退廷退カシムルヲ云フセシムルヿヲ得

第二百七十三條　公廷裁判所内ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス

可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ビ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ビ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ

裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケザル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ビ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラズ

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

第二百七十七條　檢察官被告人及ビ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマデ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラザルノ申立ヲ爲ス

ヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラザルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百七十八條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條　檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ビ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヿヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預ヲ云フ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマデ何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條　忌避又ハ回避ノ申立及ビ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マデニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却其事ヲ取舉ゲザル云フシタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ

取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災危難種々ノワザヲ云フノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同ジ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同ジ

第二百八十四條　裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ビ檢證書類ヲ朗讀ヲ云フ セシムルヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述申ノベルヲ云フト同一ノ效ヲ

有ス

第二百八十五條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ云フシヲ得テ調書說明明カニ說キ演ルヲ云フノ爲メ之ヲ呼出スヲ得

第二百八十六條　豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得

豫審ニ於テ錄取書取リシタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サヾル時證人呼出ヲ受ケ出廷セザル

時又ハ豫審及ビ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ヘ合スヲ云フス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀舉ケ讀ミルヲ云フセシムルヿヲ得

第二百八十七條　第百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ユルス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ交フルコトヲ接ヲ云フ同シヲ可カラズ又陳述前辯論ニ立會フ可カラズ

第二百八十九條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一　檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三　被告人及ビ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條　證人數名アル時ハ氏名姓名ニ目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更カヘ更ルヲ云フスルヿヲ得

第二百九十一條　證人及ビ被告人ハ裁判長ニ非ザレバ之ヲ訊問スルヿヲ得ズ

陪席其席ニ立會判事及ビ檢察官ハ裁判長ニ告ゲ證人及ビ被告人ヲ訊問スルヿヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナ

ヲシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヿヲ裁判長ニ求ム
ルヲ得

第二百九十二條　證人ノ陳述不實證人被告人ヲ害ニ陷ノ爲メ事實ヲ隱蔽シ又ハ重罪輕罪ノ被告人ヲカバフニシテ故意ニ出デ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ僞證ヲナス如キヲ云フ

檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キ

ノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取書キ取ルヿヲ云フシ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關

係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期日ノ云フヲ言渡スヿヲ得

第二百九十三條　證人呼出ニ應ゼザル時ハ裁判所ニ於テ卽時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ビ控訴ヲ許サズ

一　違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二　輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セズ

ト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條　前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヿ能ハザリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳裁判所ヲトノ後ハ其開廳裁判所ヲ開クヲ云フヲ云ツルヲ云フシタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條　證人呼出ニ應ゼザル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期日ノヘスルヲ云フヲ言渡ヲ爲スヿヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サヾル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條　證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セザル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ビ再度ノ呼出ノ費用云フヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ビ公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條　第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應ゼザル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分

ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明解釋ヲ云フノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條　被告人聾者ヲ云フ啞者ヲ云フ又ハ國語日本語ヲ云フニ通ゼザル者ナル時ハ第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條　被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ベ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ヲ云フノ爲メ必要ナリトスル時

ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第三百條　證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ビ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヿヲ得ズ

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ニ辯論ヲ爲スヿヲ得但辯論ノ最終其事ノ終リヲ云フニハ被告人又ハ辯護人ナシテ發言セシム可シ

第三百一條　檢察官公訴ヲ拋棄止メテ仕舞ヒヲ云フスト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條　辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立ア

リタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非ザレバ之ヲ爲スヿヲ得ズ

第三百三條　民事擔當人ハ民事擔當人ハ被告人ノ爲メニ民事上ノ責ニ任スル者ヲ云フ父母後見人雇主委託主等是ナリ始審終審ヲ問ハズ何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヿヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ナシテ其訴訟ニ關係セシムルヿヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待

タル直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實事柄ヲ及ビ法律ニ依リ其理由ヲ云フヲ明示シ、且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條　無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヿヲ明示ス可シ

第三百六條　裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ私訴ニ付キ取調未ダ充分ナラザル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ

爲スヿヲ得

第三百七條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用入費ヲ云フノ全部又ハ幾分ヲ擔當引キ請ルヿヲ云フス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴負ケ公事ヲ云フシタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハズ沒收ニ係ヲザル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付引キ渡スヲ云フスルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條　本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマデ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條　禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ヲ云フシタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非ザレバ上訴ヲ爲スヿヲ得ズ

第三百十一條　勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十三條　訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災天災地變ヲ云フ厄難ヲ云フニ因リ上訴期限ヲ經過ヲ云フスギサルシ

タル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルヿヲ得但變災厄難ヲ免カレサルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條　書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人相手方ヲ云フニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ撿察官ノ意見ヲ聽キ先ヅ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ

其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラザル者ト判決シタル時ハ他ノ原由ヲ云フアルニ非ザレバ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條　裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日翌日同シニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印氏名ヲ書シ實印ヲ抑スヲ云フス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其

事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本ヲ寫シ本又ハ其拔書拔キ書ヲ云フヲ求ムルヿヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時內ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條　對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ビ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヿ及ビ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヿ及ビ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマデ上訴期限ハ經過ヲ停止ス

第三百十七條　書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一　裁判ヲ公行シタルヿ又ハ傍聽公衆ノ傍聽ヲ云フヲ禁ズルノ言渡ヲ爲シタルヿ及ビ其事由

二　被告人ノ訊問及ビ其陳述申述ヲ云フ

三　證人鑑定人ノ陳述及ビ宣誓ヲ云フヲ爲シタルヿ若シ宣誓ヲ爲サヾル時ハ其事由

四　原被ノ證據物件

五辯論中異議ノ申立アリタルヿ後日ヲ期シテ待テト云
同シ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヿ是等ノ事件事柄
ヲ云ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ビ裁
判所ノ判決
六辯論ノ順序及ビ被告人ヲシテ最終其事ノ終リヲ云フニ發言
セシメタルヿ

第三百十八條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ビ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ルヲ云時ハ其旨及ビ同一ノ裁判官出席シタルヿヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事兼テ備ヘ置ク判事ヲ差シテ云フヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ビ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條　公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓作リ終ルヲ云フニシ裁判長及ビ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セザル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シラヘ考フルヲ云フ若シ意見アル時ハ其紙尾意見書ノ終リヲ云フニ記載ス可シ

第三百二十條　裁判言渡書及ビ公判始末書ノ正本本紙ヲ云ハ其裁判所ノ書記局ニ保存留メ置クヲ云フス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ビ書記裁判言渡書及ビ公判始末書ノ謄本ニ認印見留印ヲ押シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章　違警罪公判

第三百三十一條　違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百三十二條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名姓名ヲ職業家業ヲ住所居所ヲ出廷ノ日時被告事件及ビ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サヾル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ビ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

第三百三十三條　呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百三十四條　違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セズ

シテ檢證處分ヲ爲スヿヲ得

第三百二十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケズシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺（名札ヲ云フ）ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百二十六條　書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應ゼザル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條　違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀（讀ミアゲル）ヲ云フス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述（ノベル）ヲ云フス可シ

第三百二十八條　違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認（承知ト同シ）スルヤ否ヲ訊問（問ヒ尋ル）ヲ云フス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條　被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及バズ但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヿヲ得

若シ白狀ヲキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ビ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條　呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セザル時ハ檢察官及ビ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セザル時亦同シ

第三百三十二條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日內ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條　裁判所ニ於テハ先ヅ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヿ及ビ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間

少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マデノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヿヲ得ズ

第三百三十五條　犯罪ノ證憑充分ナラザル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條　被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條　被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヿヲ得

第三百三十八條　違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一被告人ハ勾留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ビ民事擔當人ハ要償ヲ云フ金ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額高ヲ云ヒ超過ヲ云フヿヲ超過シタル時